

コンケン大学での居候生活 (17)

伊藤信孝

コンケン大学客員教授・工学部

本報では、チェンマイ大学からコンケン大学に移籍して半年になるので、生活も落ち着いてきたが、この機会に、この「半年で経験したコンケン大学でのいくつか」を紹介する。コロナ禍で例年とはいささか異なる部分が多いので、ここでの記述が特別な年のものになるかも知れないことを予め断っておく。筆者が個人的に使用、あるいは利用している機材は基本的に筆者自身の私物であり特別に大学から供与、貸与されている物では無い。毎日使用する身近な機材としてはラップトップである。チェンマイ大学でも公的に利用できるPC（デスクトップ）はあったが殆ど使っていなかった。デスクトップであるが機材の型式やOSのバージョンが古く、立ち上げに時間を要するし、アクセスしても応答も遅い。自然に自身の私物の使用が日常となる。プリンタは個人的に購入して所有していたが、時間の経過と共に古くなり、インク代も馬鹿にならないのでスキャナーとしての利用のみにとどめていた。コンケンに来てプリンタの接続を試みたが、型式が古く、またチェンマイからの搬送時の振動からか、調子が悪くなり、ラップトップとの接続すらできなくなった。移籍当初はそれほど必要では無かったが、そのうち落ち着いてくると、メールでのやりとりが増え、書類への署名やその後のスキャンをしての返信等が増え、また推薦状や承諾書への同様の手続き、書類作成の必要が出てきて、手元でのプリンタ、スキャン機能を備えた機器の利用が必要となった。移籍当初から聞いてはいたが、プリンタのそうした機能を利用するには大学レベルでのIDの入手が必要で、これにより学内の何処のプリンタでも使用できるようになるとのことであった。そうした中で上記の様な署名を必要とする書類作成と、その配信が急務となってきた。やむなく、かつての留学生で教員をして居るA氏に相談し、プリンタの入手を依頼した。ところが事務スタッフが怒り狂ったような表情を顔に出して憤慨している。IDで全てが解決出来るのに何故プリンタの手配を頼むのか、と言う事への怒りである。しかしIDの発行をして貰って居ない自分には、「ではなぜ早くIDを発行してくれないのか」と言いたかったが、その場は抑えた。ID発行が行われたのはそれから1ヶ月もした頃であった。そんなに怒るのなら「何故、もっと早く対応してくれないのか」と口には出かかっていたが、ここでも我慢した。発行されても使い方が分からねば教えを請わねばならない。不愉快な気持ちでのつきあいはできるだけ避けるのが好ましいから、この場でも控えた。今では問題なく利用できる様には成ったが、対応の遅さには多少の差はあるが、タイの何処の大学もよく似ている。遅れるのが当たり前であり、予定通りに進行することの方が珍しい、いつかは言わねば成らないのであれば早めに連絡しておくのが常道であるが、それはタイの常識ではない。しかしこのような姿勢をルーズ(loose)だと筆者は言わない。英語ではフレキシブル(flexible)と表現している。ひょっと

すると失礼な表現として受けとられるやも知れないからである。あるとき、日・タイの大学間でのシンポジウムで、日本でのホスト大学に来たタイ側の参加者が、日本側が待ち合わせ時間の設定をし、タイ側の参加者が定時に待ち合わせ場所に行ってみると、来ているはずの担当者も車も来ていない。待つこと 10 分ほどで担当者も車も現場に来たが、その待ち時間の間に、タイ側のいくらかが「日本人もそれほど時間に正確ではないのではないか」などと発言していたので、「いや、それは違う。タイ人は何時も遅れてくるので、此方もいくらかサバを読んで時間を設定したのだ」と本音を披露すると苦笑して赤面していたのを覚えている。自分達のことを棚に上げて相手の行動に批判的なのは頂けない。これでいくらか反省もするであろうなどと想った事もあるが、祖国タイに戻れば元の木阿弥である。教員の多く、殆ど全員は海外での学位取得で留学を経験しているし、日本留学を経験している教員も多くは居るが、率先して日本の時間厳守を維持して居る教員は少ない。伝統なのか、何が彼らをそうさせるのか、筆者には分からないが、かつての博士課程で筆者の研究室に 3 年間滞在した留学生で、現在「教員」として教鞭を執っている「彼（A）」は他の人に対してはどうかは知らぬが、筆者に対しては極めて正確に時間対応をしてくれている。日常生活をする上での対応、その他での文化、伝統、生活習慣が彼らをして日本の様な規則正しい時間厳守に移行させない何かがあるのではないかとさえ勘ぐりたくも成る。国の内外で開催の学術シンポ、国際学会、においても要旨の申し込みは何時も設定時間通りに運ぶことはない。かといって悠長に構えて、今回もどうせ遅れるだろうと「たか」をくくっていると、その様に事が運ばなかった時が心配で暢気にのんびりと考えている訳には行かない。何が為にこのようなイベントを催すのか、と言うその目的や意義にまで迫る疑問を感じることも珍しくはない。提出期限が幾度となく変更となり、馬鹿正直に対応していると時間の無駄になり、かといってじっと待っていると忘れた頃に連絡が来て早急な対応を要求される。幾度となく同じような処理やプロセスを忘れた頃に対応しなければならず、時間の無駄も甚だしい。積極的に論文発表をする気構えと必要性があればこのようには成らない。毎年の行事の一つに参加し、発表をしたと言うエビデンス（実績、証拠）を遺すのが目的で、研究成果が社会に及ぼす影響などとは関係がないかの如き認識にさえ見える。この研究で社会貢献し、農業を良くし、国を発展させるなどという自らに課せられた、ミッションにも似た使命感は見えないようである。こうした認識の元ではオリジナルな、独創的な発想などは生まれにくい。海外の新しい情報や知識が早く伝わり、それらの修得、認識、理解、習得は早いとその先がない。その習得した知識を用いて発展させたタイ・オリジナルが出てこない。キー・ワードを列举すると、研究者自身の自己に対するミッションへの自覚、社会貢献、次世代人材育成への使命感と言った部分が極めて少なく、新知識、新技術の情報収集と習得で満足し、それ以上への展開が見えない。このことはタイに限らず、アジアの諸国でも共通している。その結果の具体例がノーベル賞受賞者の人数として見ても明らかである。プリンタの I D による大学レベルでの個人認識の共有など優れたシステムが組織にあっても、他の機関の同様のシステムを超えるものが出てきていないと筆

者は見ている。オリジナルな独自のアイデアに起因する研究成果は、他の研究者レベルから遙かに上部にあるのでは無く、そのごくわずかに上にあるが、その差を詰めるのに必死の努力が要る。その強い精神力を維持する為にミッションに対する考え方、社会貢献に対する使命感が必要なのである。情報の入手は高度情報化時代を迎え比較的容易になり、むしろ入手した情報の取捨選択、整理などが重要になってきている。いわゆる情報収集だけではオリジナルなものとは認定、認識されない時代であり、それらの情報を如何に組み合わせ、利用、活用して有用なものを創造するかが、重要で、しかもその骨格を成す主たるアイデアは研究者のオリジナル発想から出ている事が必要であり、それが高い研究成果につながる。このように、設定した期限（または時間）に間に合う、または間に合わせるという事が出来れば大学はもっと飛躍的に成長するものと確信する。決まった期限が何度も再設定（リセット）し直され、せつかく締め切りに間に合う対応をしても、大多数の提出がその期限に提出されていなければ何度も同じ事を繰り返す時間の無駄が生じ、同じ事をタイムリーに終えないと、嫌気を起こさせ、またやる気をなくさせる。時間厳守を守っている研究者や科学者の多くは、その殆どがイベント当日までに疲労しきった顔での出席となる。これも大多数を持って評決する民主主義の悪用（？）と筆者は想っている。まともに規則を守っている者がそうでない大多数に振り回されていることになるからである。このような状態が継続していると言うことはその組織の構成員の多くがその状態を支持し、満足していると言う事であるから組織はそれ以上発展はしないし、その状況に着いていけない希望に満ちた優秀な人材が組織から去ることを余儀なくされ、早晚組織は衰退、凋落、崩壊への道を辿る。

チェンマイからコンケンに移籍した当初はGrab・タクシーの利用を進められ、それがベストな選択肢と思い込んでいたが、しばらくしてそうでない事が分かったことは既述した。すなわちコロナ禍で学生は大学に来ず、また頂いた国際交流専門家と言うステータスのもとでは講義は殆ど無く、海外の大学との交流事業の開拓、推進、掲載論文数の増産が主たる仕事として筆者に課せられた業務であるが、コロナ禍では動きがとれず、オフィスに出向いても1日中室内にとどまり、主としてオンラインでのセミナーやミーティングが主であると身体にも良い影響は生じない。タクシーに乗らず歩いてみると、適度な距離であり、それ以来、歩く事を継続している。しかしタイの社会では人々は滅多に歩かない。車やバイクでの移動が一般的であり近距離でも歩くと言うことは殆ど無い。またコロナ禍で外出に出ることもしばし禁止で、「密」を避ける規則も出されたりして、容易に出歩くこともできない。その代わりに繁盛しているのが食料や必要生活用品の買い付け、配達業務が多く成り、益々道路はバイクで混雑する。さらにアパートから大学のオフィス迄の途中には大学病院があり、朝早くからの出勤で、看護婦（士）の多くがナース・キャップをかぶり既に白い衣類をまとい、病院に到着したら着替えをしなくても直ぐに勤務に就ける体勢の女性達が、これまたバイクで向かうから、大学の、あるいは大学病院への道路は混雑する。徒歩での通勤をして居る者は殆ど見ない。信号のない交差点ではお互いの運転手

の譲り合いが基本であるが、誰しも先を急ぐから、その余裕もない。そうした混雑の中をすり抜ける為に筆者は一工夫して写真に示す通行横断表示板を作り常時携帯している。当初からそのデザインなどを考えて居たが、なかなか浮かばない。日本の100円ショップに相当する店に出向くと2本の卓球のラケットとピンポン球がセットになった品が目に入った。もちろん100円以下で、正確には20パーツ(60~70円)である。赤と黒の薄いスポンジが貼り付けてある。このラケットを使う事に決定したが、文字表示が無いと運転者は止まってくれない。また英文表示だとできるだけ字数を少なく、一文字当たりの大きさを大きくし、遠くからでも運転者の目に付きやすくする事が必要である。ラケットに貼ってある赤と黒のスポンジは運転者の目には目立ち、わかりやすいが文字は更なる歩行者の行動、意思を伝えるために重要である。コントラストのある色と言うことで、当初はシロのインク消し(修正液)を考えて居たが、あまりくっきりしない。ラケットとピンポン球のセットの数倍の投資をして、如何なる文字を書き、それを書くための材料を探しつつ時が過ぎ、やっと幅の狭い両面テープを見出し、出来上がったのが写真(図1)に示す自作の製品(?)である。効果の程は良好で、手応えを感じている。簡単なものでも自作のオリジナル性(独創性)を重視した対応をして居る。

ところで、もう一つ現在の生活の経験からコロナ禍での最重要注意事項を挙げて、心得として、今後の準備に備えたい。

- 1) ぜったいに感染しては成らない(感染することは許されない)。
- 2) 感染したという噂すら立たない状況に常に自分があるよう気をつける。一度感染したという噂が出ると、他の人に迷惑を掛けるだけでなく自分自身が動けなくなる。特別な所に隔離される事にもなりかねない。いわゆる風評被害を出さないことである。
- 3) 建物に入る前の体温検査では規定の温度以上になると警告ブザーがなる。37度がその上限設定のようである。ここで十分注意しなければならないのは、体温測定機器への手のひらのかざし方によっても温度計が誤動作することがある。37度を超えるとブザーの音が高くなり、周囲の人が一斉に自分に目を向ける。しかし何をどうすれば良いかは分からない。ただひたすらブザーが鳴り止むのを待ち、再度手をかざす。それでブザーが鳴らなければ機器の誤動作で問題は解決するが、それ以外の対処は分からない。不用意に機器に手をかざさない様にする事である。
- 4) 暑いのでアパートでクーラーをかけ、知らず知らずの間に眠ってしまうと風邪を引く。風邪は一度引くと、直るのに数日もしくはそれ以上はかかる。運が良ければ1日でも回復する。このような生活状況の下では、理由を問わず1日で回復する必要がある。すなわち、今日いくらかでも風邪を引いたと想えば明日の出勤時までには完治する必要がある。さもないと機器検査で足止めを食らう。一人でも近くで感染者が出ると組織全体が閉鎖に成り、学生達もオンライン授業で大学に来れなくなる。
- 5) すなわち結論から言えば、絶対に感染しては成らない状況に自分があることを認識して居なければ成らない。その原因が自分にある場合は決してあってはならない。また他

人またはその他の原因であろうと無かろうと、感染はしない、させないことが至上命令なのである。

- 6) また保険などの対応が取られていれば問題はないと考えるのも問題である。保険で経費はカバーされるにしても、感染し回復するまでの期間は、最悪の場合には休職、入院、隔離となるから十分な危機管理意識が必要である。

幸運にも、筆者は未だその様な状態に遭遇したことはないが、それが明日なのか、1週間後なのかも予測できない。ひたすら感染したりさせない状況の維持管理を堅持するしかないのである。極めて厳格な生活規制が現実にはある、と言うのが筆者の正直な思いである。

コロナ禍が何処まで続くのか、その予想は難しいが、時間はかかるであろうが、いずれは落ち着くというのが大方の見方であり、またそうで無ければ人類の生存そのものも危うくなる、必死でワクチン開発に世界の大手製薬会社がしのぎを削っているが、中にはそれをビジネス・チャンスと捉えている企業も少なからずあると言う。天災は忘れた頃にやってくると言うが、コロナ禍は人災かそれとも天災か？ ロックダウンを宣言し、様子を見ては解除し、経済振興に切り替えたいが、その時期が見えてきた頃に新たな変異株が発生する。神が与えた試練なのか、悪魔の戯れか。発生が無ければ百万近い人達は無意味に死に至る必要は無かった。感染者数が減少して、規制緩和に向かうと、急に増加に転じる。

この原稿を書いている今も、2名ほどの感染者が見つかり、隔離され、大学病院は厳しい統制にあると言う。1人や2人でも感染者が出ると、県境を跨ぐ移動はキャンセルで仕事にならない。立てた予定は全てキャンセルで、鬱憤の持って行く先がないからストレスが溜まる。しかし何処にも持って行きようがないから、気が滅入る。現場に行こうが行くまいが給料が貰える公務員のような立場であれば、直接職場に出向くことはしなくても良いが、その日の労働収入が生活に直結する業種では憤懣やるかたない。そんな気持ちを知ってか、知らずか、自らが決めた規則を簡単に破り、無視し飲食に舌鼓を打つ破廉恥な行為が行政側からも出ている。まさに国民を思いやる本気度もなければ範を示す自覚も見えない。失職が元で自殺者も増えていると言う。早い事態收拾が望まれる。国際化が強調されてきた近年の30年余であるが、世界的にも「嘘 (Fake)」と「金 (Money)」の連鎖が蔓延している。人類も落ちるところまで落ちたと感じる人はどれだけ居るであろうか。国家としての「明確で迅速な意思決定」の遅さが、この2つの連鎖に起因している。大学も国際交流は重要な事業の一つであるが、参加学生達に何を教え、何を話合う機会を設けてきたのであろうか。論文発表の実績、証拠作り、大学としての業績の増加ばかりに力が注がれ、肝心の国際交流教育にあまりにも無頓着であったのでは無いであろうか。まともな挨拶もできず、エチケットもマナーも無視し、プログラムに組み込まれたイベントにも興味や関心のないものはスキップし、協調も誇りも責任感もなく公私の区別も付かない人材を育成しても意味がないが、事実はそのような製品（卒業生、人材）が結果としてできている事にどれほどの関係者が気付いて居るであろうか。

さて、いささか愚痴になったが、愚痴を言うのが本来の趣旨でないので、ここでは差し控える。以下にコンケン大学で「如何に過ごしているか」を示す生活の一端を示す写真を添える。



図1 道路横断時の手製の表示版



図2 工学部の中心的、象徴的建物



図3 象徴的な建物に隣接する筆者の居る建物（向こう側）。9階建ての7階の国際交流事業分室に筆者の部屋がある



図4 筆者の居る建物の道を挟んだ隣は農業工学科（道路の右側）



図5 理学部の建物



図6 かつての留学生在が成長して、コンケン市内の企業に来たときの夕食会



図7 筆者の居る建物の遠望（中央）



図8 前の写真のクローズアップ（屋上にある皿状の構造物が象徴的目安）。